

修士論文（要旨）

2010年7月

有料老人ホームに居住する高齢者の
精神的健康に与える社会的ネットワークの効果

指導 杉澤秀博 教授

老年学研究科

老年学専攻

208J6902

北井純子

目次

I.	はじめに	1
1.	問題の所在	1
2.	老人ホーム入居者に関する先行研究	2
3.	目的	2
4.	仮説	3
II.	方法	3
1.	対象者	3
2.	方法	3
3.	分析方法	4
4.	倫理的配慮	4
III.	結果	4
1.	基本属性、身体的、精神健康および社会的ネットワークの変数の分布	4
2.	社会的ネットワークが精神的健康に与える効果	5
IV.	考察	6
	参考文献	8
	表1 分析対象者の特性	9
	表2 精神的健康とネットワークに関する変数の相関係数・偏相関係数	10
	資料	
	調査票	

I. はじめに

我が国では近年、有料老人ホームに居住する高齢者が増加している。安心した老後を送るためとはいえ、有料老人ホームへの入居は長年住み慣れた地域を離れることになることから、入居前と入居後とで子供や親族、友人との関係性の変化が考えられ、他方では、過去にまったく面識のない高齢者と有料老人ホームをいう新しい環境で生活を開始することで、新たな人間関係等を再編しなければならない。有料老人ホームに入居し、居住するということは、安心した老後を過ごすためとはいえ、社会的ネットワークにおいて変化がみられ、それが精神的健康に悪影響を及ぼす可能性がある。本研究の目的は、今後も入居を希望する高齢者が増えていくことが考えられる有料老人ホームにおいて、そこに居住する高齢者の精神的健康の要因を、特に社会的ネットワークに着目して検討しようというものである。その際、現在の社会的ネットワークだけでなく、入居前後における変化についても分析枠組みに加えることとした。

II. 方法

対象者は、東京都八王子市にある介護付き有料老人ホームに居住する高齢者とした。この有料老人ホームは、入居者の前住所地が八王子以外という者が多いことから、入居前後における社会的ネットワークの変化が精神的健康に影響するか否かという本研究の課題との関連で適当と考えた。入居者のうち認知機能の面で問題がない 27 名を対象者として選択した。認知機能の評価は介護認定調査に基づいている。調査項目は、身体的・精神的健康度、社会的ネットワーク、基本属性等とした。分析は統計ソフト PASW statistics18 を用い、従属変数に Geriatric Depression Scale (GDS) の得点を投入し、独立変数には種類別ネットワーク（子供、親族、有料老人ホーム外の友人）の現在と入居前後の変化、有料老人ホーム内の友人数とその関わり方を位置づけた。分析対象数は少ないため、分析に際してはネットワーク変数を同時に投入するのではなく、種類別に投入した。その際、ネットワークと精神的健康の関係に影響する変数については、その影響を調整するため、偏相関係数を用いた。調整する変数は、事前に年齢、性別、教育年数、配偶者との離死別経過年数、入居に関わるプロセスとして入居経過年数、前住所地、入居決定者、当該ホームでの生活満足度を候補に上げ、ネットワークと精神的健康との関係を検討したが、唯一現在の活動能力指標の得点のみが両者に影響する変数であったため、調整変数としては現在の活動能力指標の得点を用いた。

III. 結果

10%未満の有意水準でみると、活動能力指標の影響を調整する前では、親族との回数、ホーム外との友人との面会回数、老人ホーム内の友人数、老人ホーム内の友人との関わりの内容が「一緒にお茶を飲む」、「一緒にサークルに参加する」といった要因が精神的健康に影響していることが明らかにされたが、その方向性は、親族との面会回数についてのみ精

精神的健康を悪化させて方向で、他は向上させる方向で作用していた。活動能力指標の影響を調整した偏相関係数を算出すると、10%未満の有意水準で、親族との面会回数が精神健康にある程度影響していた ($P<0.10$)。しかし、この方向性は精神健康を悪化させる方向で作用していた。

IV. 考察

分析の結果、有料老人ホームに居住する高齢者の精神的健康にある程度の効果があった社会的ネットワークは、現在における親族との面会頻度のみであった。興味深いのは、その効果は精神健康を悪化させる方向で作用していた点である。統計的に見て有意ではないが、一般的な見方とは逆に、親族との面会頻度の入居前後の変化、友人との面会頻度の入居前後の変化のいずれも、減少した人では変化がないとか増加したという人と比較して精神健康が高いという結果が見られている。有料老人ホームへの入居理由には、自由に暮らせ、プライバシーが守れるなどが上位に上げられていることを考えあわせるならば、入居している高齢者にとっては、入居後も友人や親族などの関係が継続することは意外と煩わしいことであり、それによって精神的健康に対してマイナスに作用しているのかもしれない。この結果の意味するところを質的な研究などによって解明するとともに、他の対象での追試も必要といえよう。

既存の研究では、入居者の主観的幸福感に対して老人ホーム外のネットワークでは子供が、老人ホーム内のネットワークでは友人との関係が強い影響を与えていることが示されている。本研究では、いずれも有意な効果が確認されなかった。しかし、本研究から強い効果がないと結論付けることはできない。それぞれの偏相関係数が精神的健康を低下させる方向で作用していたものの、ケース数が 27 であり、統計的検出力が低いために有意な効果が観察されなかった可能性がある。ケース数を増加させるなどして知見の妥当性を検証する必要がある。

文献

- 1) 厚生労働省『平成 20 年社会福祉施設等調査結果の概況』、
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/08_2008年
- 2) 社団法人全国有料老人ホーム協会『もっと知りたい有料老人ホーム第1部～有料老人ホームを知ろう』、2007年
- 3) 朝日新聞出版『入居金と月額費用で決める！高齢者ホーム』、2010年
- 4) 岸本幸臣【他】「高齢者の住生活に関する交流：有料老人ホームにおける人的交流」『甲子園短期大学紀要』第5号、23-33、1986年
- 5) 竹嶋祥夫「立地条件の違いによる高齢者の外出行動に関する研究—有料老人ホーム居住者を事例として」『老年社会科学』第15巻第1号、15-28、1993年
- 6) 平井誠「御宿町における有料老人ホーム入居者の属性と前住所地」『人文学研究所報』37号、67-75、2004年
- 7) 梁明玉「有料老人ホーム居住者の主観的幸福感：子どもとの関係性に着目して」『日本家政学会誌』第58巻第10号、623-632、2007年
- 8) 松村孝雄【他】「高齢者コミュニティにおける高齢者の生活適応の現状と適応プロセスに関する研究」『文部省科学研究費補助金研究成果報告書』1990年
- 9) 斎藤民【他】「高齢者の転居の精神的健康への影響に関する研究」『日本公衆衛生雑誌』第47巻第10号、856-865、2000年
- 10) 矢富直美「日本老人における老人用うつスケール（GDS）短縮版の因子構造と項目特性の検討」『老年社会科学』第16巻第1号、29-36、1994年
- 11) 古谷野亘【他】「地域老人における活動指標の測定—老研式活動能力指標の開発—」『日本公衆衛生雑誌』第34巻第3号、109-114、1987年
- 12) 藤崎宏子「高齢者・家族・社会的ネットワーク」『培風館』、東京、1998年
- 13) 権藤恭之【編】「高齢者心理」『朝倉書店』東京、2008年
- 14) 直井道子「幸福に老いるために 家族と福祉のサポート」『勁草書房』、東京、2004年